岡山市・新竹市友好交流協定締結10周年記念

「台湾新竹演劇公演」

◆はじめに

平成26年4月29日、台湾・新竹市演藝廳「國際會議廳」は大きな拍手と歓声で揺れていました。市民参加型の演劇を海外で、台湾・新竹市で上演するという、私達の一見とんでもない企みが遂に結実したのです。

その日、会場である國際會議廳では、岡山からやってきた日本人と台湾新竹市の高校生や大学生が一つになり、笑いや涙、感動を「共有」する、そんな空気に満ちていました。それは国境や言葉の壁を超えた、本当に奇跡のような一日でした。

誰もが最初は市民参加の舞台が海を超えて台湾新竹市の地で上演できるとは思っていませんでした。しかし「友好交流協定締結記念」を機に「岡山の市民レベルでの文化交流」を創造したい。そして「東日本大震災の折に、台湾から多額の支援をいただいたことへの感謝」の気持ちを伝えたいという想いが、様々な人の心を動かし、この公演へと導くことができたのです。

◆市民参加型演劇「演劇 on 岡山」から「新竹演劇公演実行委員会」「演劇 move ON」へ。

この奇跡のような日と準備に費やした素晴らしき1年間を説明する前に、まず母体となった「演劇 on 岡山」についての説明をしなくてはならないでしょう。

「演劇 on 岡山」とは、岡山市にあるルネスホールの特別企画事業として平成23年に開始されました。岡山市に在勤在学及び岡山市民を対象に出演者を募り、プロの演出家を岡山に招聘（3ヶ月間岡山に滞在）し、3ヶ月間で稽古から公演までを行う市民参加型の文化創造事業です。

脚本は岡山所縁の物語を題材にした作品を一般公募し、平成26年3月までに4つの作品が生みだされてきました。（演劇 on 岡山Ⅳは一般脚本該当なし）

※現在は演劇 on 岡山Ⅴ（平成27年1月から3月開催予定）に向け企画進行されています。

この市民参加型演劇の第三弾「演劇 on 岡山Ⅲ」の公演演目が、今企画の根本になり台湾・新竹市で上演された『月の鏡にうつる聲』です。

「演劇 on 岡山Ⅲ」は、過去最高の参加者と観客動員数をほこり、観劇者からも感動の声をいただきました。

さて、「演劇 on 岡山」当初の企画段階に於いて、海外公演を目標に考えていましたが、出演者の中には初めて舞台を経験する者も多く、実現は難しいと考えられていました。出演者達も、海外公演の話は想像の範疇を越えるもので、「プロの劇団でもない自分達が海外公演なんてとんでもない！」と思っていました。

しかし平成25年3月、大きな歓声とともに幕を下ろした「演劇 on 岡山Ⅲ『月の鏡にうつる聲』」の興奮は、すぐに冷めるものではありませんでした。終演から2週間が過ぎた頃、「演劇 on 岡山」の当初の目標である海外公演の話が再燃したのです。そして私達の間に、大震災の時のニュースが過ぎりました。・・・やるなら、台湾で。

この時、出演者も企画者も、その公演に関わった者すべてが、台湾でこの演目をやりたいという気持ちを燻らせていました。

さて、面白いのはここからです。それぞれが社会生活に戻った時、そんな気持ちは日々の生活に

埋もれ、忘れていくものかもしれません。しかし、この時の私達は少しだけ違っていました。台湾に『月の鏡にうつる聲』を持っていきたい、上演したいという想いをぶつける先をそれぞれで探し始めたのです。実際に形になるかどうかは別として・・・。

そのうち興味深いことが起こりました。それぞれが探していた海外公演の道程が、岡山市の関係者にお会いした時、「ひとつ」に紡ながった（つながった）のです。

それは「演劇 on 岡山Ⅲ」公演パンフレットとチラシを手に、期待と不安を募らせながらもお話を持ち掛けた時でした。その方がふと「そう言えば今日、君たちと同じように台湾に行きたいから協力して欲しいと言ってきた方がいたのだけれど」と、鞄から取り出した一枚の紙。それが「演劇 on 岡山Ⅲ『月の鏡にうつる聲』」のチラシ（写真１）だったのです。私達は驚き、「正にその話です！！」と思わず叫んでいました。

なんと私達がお会いする数時間前に私達とは別で方法を探っていた「演劇 on 岡山」プロデューサーが、どうにか台湾でこの舞台を上演したい、

写真１（演劇 on 岡山　公演チラシ）

文化交流として公演ができないだろうかと話を持ちかけたばかりだったのです。これには相手の方も驚きを隠せぬようでした。偶然か必然か、自分に向けて二方向から矢が放たれたのですから。

そして想いの込められた二本の矢は、その方の胸を射抜いたわけです。この一件で、私達とその方の距離が一気に近づきました。

「台湾に対する想い、東日本大震災の義援金への感謝や友好交流 10 年目として演劇公演をしたい。しかもこの岡山で生まれた、市民参加型のオリジナル劇を持って新たな文化交流の発端を探りたいという気持ちはよくわかりました。私も方法を前向きに考えてみましょう」との言葉は、私達の光明となりました。

その後、私達は二つの矢をひとつに集約し、即座にスタッフを整えて「研究会」を立ち上げました。研究会は岡山市との交渉や台湾公演への時期設定や交渉を含め本格的に実現に向けた「実行委員会」と、その内部に属し実務運営を担う「演劇 move ON」と形をより現実的なものへと変えて行きました。手探りながらも、台湾公演を実現したいとの考えのもと必死でした。

そのうち私達は台湾に対する想い、この演目に対する想い、その想いから生まれたこの話が、現実に向けて動き出している実感を持つと同時に、責任感と強いプレッシャー、そして本当に台湾の方々に私達の想いが伝わるのだろうかという不安や緊張感に変化していきました。

私達の想い、「ありがとう」が伝わるのか・・・と。

◆ゼロからイチを作るということ（準備期間の１年前から出発まで）

物事が動く時の速さは、経験や自分の気持ちなど知らぬ顔で、進めているはずの自分達でも追い付けないほどの勢いを見せることがあります。事実、矢を放ったあの日から１ヶ月後には、岡山市

のバックアップが見え、運営が始まるまでもわずか２ヶ月程でした。そしてこの時点で先に述べた研究会から発展した実行委員会発足や運営事務局の設置も済んでいました。

岡山市と新竹市との情報交換に関しても両市の国際課に担当者をつけていただきました。また、岡山県下の「山陽学園」と、姉妹校である「台湾新竹市中華大学」の協力も決まり、公演までの大まかなスケジュールの決定を行いました。

ここで、全体的な流れを記述しておきます。

※写真２（説明会）

※写真３（決起会）

●平成 25 年

４月～６月
「岡山市・新竹市友好交流協定締結 10 周年記念『新竹演劇公演』実行委員会」発足。同時に運営事務局「演劇 move ON」設置。
「演劇 on 岡山Ⅲ『月の鏡にうつる聲』」の演出家であった関美能留氏に演出を依頼。

７月　新竹市・岡山市間で情報交換が始まる。同時に新竹市の中華大学との情報交換を行う。

８月　「演劇 on 岡山Ⅲ」出演者の中から参加者を募集（再演のため）。

10 月　新竹市下見及び打ち合わせのため、演出家とプロデューサー渡航。公演日を決定。

11 月　出演者 13 名決定。

12 月　参加者への説明会開催。（写真２）
この時点で公式に情報を公開。『月の鏡～』チラシデザイナーに再デザインを依頼。

●平成 26 年

１月　出演者及びスタッフを含む、全ての参加者による決起会を開催。（写真３）
協賛企業募集を呼びかける。

２月　公演チラシ完成。

３月　稽古開始（写真４）。公演予告動画を YouTube にて公開。

４月　岡山公演本番（20 日ルネスホール）
新竹公演本番（29 日新竹市演藝廳）

この期間の中で広報（チラシ・パンフレット・予告動画制作）や公演をどのように執り行うかなど、決めなければならない事が山積みでした。

更に、実行委員会・運営事務局もまた市民であり、それぞれが生業を持った上で今回の企画に携わっているため、運営に割ける時間はわずかでし

※写真４（岡山稽古）

た。そこで、今回の参加者全員で分担して運営を行う方式を執りました。その根底には私達は公演で利益を追求しているわけではない、ましてや今回は自らの意志で台湾新竹市に演劇を通していっぱいの「友好ありがとう」「支援をありがとう」「観に来てくれてありがとう」それらの様々な「ありがとう」を届けに行くのだ。だからこその考えでした。

当然潤沢な予算があるわけではなく、日に日に周囲の協力の「聲」は大きくなってきているものの、資金集め等やったことのない市民には楽なものではありませんでした。

それでも、公演直前まで資金を集め、本当に多くの協賛金や寄付金、そして助成金、参加者の自己負担金によりなんとか資金繰りの目処がたちました。出演者やスタッフを始め、新竹市や岡山市の関係者の方々も一丸となって、私達を影日向に支えて下さったからこそ、活動から約１年という短期間でどこにも類を見ないだろう市民参加型演劇の海外公演実現まで漕ぎ着けたのです。

そして皆それぞれに仕事を持ちながら、運営と稽古をこなす日々はあっという間に過ぎていき遂に岡山公演本番の日を迎えました。

◆岡山壮行公演の意味と、見えたもの。

ここで今回台湾新竹市での演目『月の鏡にうつる聲』についての説明をしておかなくてはならないと思います。

この演目は日本人なら誰もが知っている「桃太郎」の 30 年後を描いた作品です。

『鬼退治の後、桃太郎は吉備の里を治める要職につきます。しかし、桃太郎は酒に溺れダメな中年桃太郎になっていました。更に、鬼退治の日から 20 年間、吉備の里では雨が降り止まず、鬼の唸り声が鳴り響いています。

降り止まない雨のせいで村人の生活は困窮し、遂に村人達は暴動を起こします。その混乱の中、桃太郎は初めて鬼退治の真相を明かすのです。そこには鬼となった温羅（うら）と桃太郎の友情、都の策略が潜んでいました。

様々な人物の想いが交錯した鬼退治の真相、そして止まない雨の理由が明かされ、再び桃太郎が立ち上がる』

という桃太郎の鬼退治に隠された真実が語られる物語です。驚いたことに、台湾では昔話としての「桃太郎」が有名で馴染みのある話なのだそうです。

そしてこの演目は 4 月 29 日の台湾公演に先駆け 4 月 20 日に岡山壮行公演が企画されていました。一日限りの再演です。

この様な市民参加型の企画で再演することはかなり異例ですが、この岡山公演はそれ以上に大きな意味がありました。

「言葉に想いを乗せて届ける」ということを、まず岡山でできなければ、台湾公演は成り立たないと考えられたからです。

今回は台湾でも日本語で上演をするため、「言葉の壁」を越えることが関門でした。字幕や同時通訳等の案も出されましたが、「何も飾ることなく、自分自身がきちんと想いを言葉に乗せ、届け

ようとすれば言葉は分からずとも想いは届けられる」という演出家の判断で日本語での上演を決めました。

私達は想いを言葉に乗せる、届けるということを意識して稽古に励みました。しかしその前に、日本語が通じる岡山で言葉が届かなければ、とても台湾では通用しない。それを推し量る重要な公演だったのです。

岡山公演の前日まで稽古を重ね、徐々に出演者の中で、期待と不安、緊張感が高まっていくのを感じました。

果たして想いは伝わるのか？ここで伝わらなければ台湾ではどうなるのか？不安を上げれば限(きり)がありません。しかし､開演して間もなく、その不安は高揚へと変わります。

4月20日14時、岡山公演開演。

いざ舞台に立ち、客席に目を向けると、市民演劇の再演にも関わらず、多くの人で会場が埋まっていました。そして話が進むにつれて場内の雰囲気が少しずつ変わっていくのを感じました。

物語の中盤、村人達が桃太郎に石をぶつける場面では、観客が村人として参加できる演出になっており、大いに盛り上がりました。終盤に入り、桃太郎と温羅の互いを想う気持ちが語られる場面では、すすり泣く声が聞こえてきました。そして迎えたクライマックス。この時、出演者やスタッフ、そして観客の全てがその瞬間を共に感じ、涙や感動を「共有」していました。(写真5)

私達にとって、この岡山公演の反響は自信となり、台湾公演への大きな励みになりました。そしてその一週間後、私達は台湾の地に降りたっていました。

◆そして台湾・新竹市演劇公演へ　終わりと始まり

岡山公演を終えた私達は、一週間後の4月26日午後、岡山空港に集合していました。ここからは4月26日（出国）～4月30日（帰国）するまでを、日ごとに追って行きたいと思います。

●4月26日、出国。

4月26日午後2時。出演者13名+スタッフ5名＋応援団3名（出演者家族)、14歳から62歳の総勢21名が岡山空港に集合しました。

集まった皆の荷物は、一様にかなりの大荷物でした。それぞれの衣装に加え、パンフレットや小道具などを詰め込んだ重たいスーツケース。しかし、確かに重いはずの皆のスーツケースは、台湾への期待がたくさん詰まったものに見えました。

そんな期待と胸の高鳴りを乗せた飛行機は、午

※写真5（岡山公演）

後３時 40 分、岡山空港を離れました。

約３時間の搭乗時間を経て、台湾・桃園国際空港に到着したのは現地時間の午後５時半。空港から新竹市内のホテルまではバスで約一時間かかります。ガイドの話を聞きながら車窓から見た異国の町並みに、感慨深さを感じました。

ホテルに到着すると、現地の方に屋台街を教えていただき、チェックインを終えてすぐ街に繰り出しました。屋台街に向かう道すがら飛び込んでくる町並みは、異国に来ているけれど、なんだか懐かしさを感じるもので特に新竹市役所や処々に残る昔の町並みは勢いと強さを感じ尚且つ郷愁さえ憶えるものでした。

そして辿り着いた屋台街の人々の活気は今の台湾を体現しているようでした。屋台街で夕食をとった私達は、しばらく散策し、翌日から稽古のためホテルへ。

●４月 27 日、仕込み・そして初稽古。

この日は午前中にスタッフが会場に入っての仕込みです。今回、帯同したスタッフは照明、音響、舞台美術の３名という少数精鋭で挑みました。演出家とプロデューサーは事前に会場を下見していましたが（前年 10 月）、スタッフにとってはこの日が初見でした。初めて踏み込む会場で、瞬発的にイメージを創り動き出す。それぞれの感性と閃きで少しずつ舞台が形作られていきます。（写真６）

午後からはいよいよ出演者が合流し、台湾で初めての稽古が始まりました。岡山公演の時とは声の反響もステージの造りも全く違う空間での稽古は、新鮮さと少しの戸惑いを感じながらになりました。

岡山公演をなぞる形で通し稽古を進めながら、出演者自身が舞台で自由に動いてみる。その立ち位置や動き、そして全体の流れを演出家が創り、それに合わせてスタッフが周りを固めていく。岡

※写真６（台湾仕込み）

※写真７（台湾稽古）

山公演にはなかったシーンが新たに加えられ、その場で舞台は創られていきました。（写真７）

舞台は生き物だ、とよく言われますが、空間によって全く様相を変えた『月の鏡にうつる聲』は正にそれでした。

演出家のタクトに合わせて、出演者とスタッフが舞台を彩っていく。『月の鏡のうつる聲』生まれ変わっていく様は、まるで進化を遂げる生き物のようでした。

この時、私達はただガムシャラに、良いもの創

りたい、「ありがとう」を台湾の人達に届けたいという気持ちで自分を突き動かしていました。それがいつも以上の集中力を生み、舞台を進化させることができたのです。

●4月28日（月）

この日は「國際會議廳」が休館日の為、稽古は休み。しかし、朝から皆緊張。というのもこの日、この公演の件でお世話になっていた中華大学の先生の意向で、日本語学科一年生の授業に参加することになっていたのです。午前8時、緊張の面持ちでバスに乗り込み一路中華大学へ！

到着後、簡単な説明を受け、いざ教室へむかいます。授業内容は学生が日本語で質問し、それに答えるというものでした。私達一人一人に対し学生は5人、1対5での質問タイムが始まりました。（写真8）

まず驚いたのが、学生達の日本語の上手さと日本文化への知識でした。日本に対する好奇心と憧れにも似た興味が真っ直ぐ伝わってきました。この親睦会はむしろ私達の方が刺激を受け、その純粋さに感動すら感じました。

帰りのバスの中では参加者が皆口を揃えてここに来てよかった、あの学生たちにあえて本当に良かったと言葉にしていました。

そしてその日の夜、岡山から強い味方が応援に駆けつけてくれました。岡山市の関係者や経済界の方々が合流し、新竹市文化局主催の歓迎レセプションを開いてくれたのです。（写真9）

この時、多くの新竹市関係者の方とお話をさせていただき、今回の文化交流に寄せる期待と希望、そして歓迎の意を表してくださいました。その気持ちに触れて、翌日に控えた台湾公演がどんなに大きな意味を持つのか、再度実感し、気が引き締まる思いでした。

●4月29日、公演当日。

遂に公演日。ホテルのロビーに集合した参加者達は、昨日のことにテンションも上がっている一方、この気持ちを伝えたい想いに満ちた精悍な顔つきでした。

今日で最後・・・この数ヶ月間の準備の事を思い起こしながら、全員で「國際會議廳」へ向かう。でも、なんだか今日で終わるという実感が湧かないような、いつもと変わらぬ空気で、馬鹿な話をしながら歩いていました。

午前9時、会場入り。

さあ。いよいよ本番の一日が始まりました。

午前中は軽く体を動かした後、音響・照明の流れを見ながらの通し稽古。昼食をはさみ午後2時

※写真8（中華大学）

※写真9（歓迎レセプション）

から２回目の通し稽古。

出演者達は、一昨日変更になったばかりの演出もきちんと頭に入れ、自分のタイミングを見つけて舞台に立っている。しっかりと形になっていました。

そして刻一刻とその時は近づいて来ています。思えば一年前、市民が文化交流なんて無理なんじゃないか、とか色々言われても、この日を信じて組み上げてきました。そこには事務局や一年前から動いていたスタッフはもちろん、出演者やその家族、両市の関係者、中華大学の先生や学生達。

本当にいままで多くの方の想いに支えられてきました。

応援してくれた人たちの想いも一緒に心に据えて、私達の気持ちを届けるために、この場所に･･･今、出せる全てを！

午後４時半、開場。

初回は新竹市の高校生が中心で観劇することになっていました。あっという間に客席が埋まっていきます。その中には岡山から来てくれた方々の顔も見えます。

午後５時、開演。

最初の出演者が舞台に上がると、拍手が沸きました。その後、新しい出演者が登場するたびに拍手で迎えられます。慣れない反応に戸惑いも感じましたが、そのうちそれはとても新鮮で、温かく私達の背を押してくれている様にも感じられてきました。

中盤に差し掛かり、高校生達も岡山から来た方々も舞台の世界に入り込んでいるのが私達にも伝わってきました。しかもその眼差しには涙が見て取れました。

そして、クライマックス。その時、私達出演者もお客様も一つだったのです。まさにその場に共に存在し、皆が温羅であり桃太郎であり村人でした。

午後６時 30 分終演。惜しみない拍手に包まれて、初回公演を終えました。（写真 10）

そしてわずか 30 分後・・・

午後７時、第二回公演開演。

二回目の主な観劇者は、先日授業に参加させていただいた中華大学の日本語学科４年生です。

舞台序盤から笑い声が場内に響きます。確実に日本語を理解してくれているが、しかし、だからこそ本気の言葉じゃないと伝わらない。出演者が皆、そう感じていたと思います。

中盤から終盤に向かい皆の顔つきも変わり、声

※写真 10（台湾公演）

さえも変わっていくのを感じました。その場にいた人達と一つの感情を共有出来た、とても貴重な時間だったと思います。

そしてこの日、会場である「國際會議廳」では、岡山からやってきた日本人と新竹市の高校生や大学生が一つになり、笑いや涙、感動を「共有」する、そんな空気に満ちていました。それはこの演目『月の鏡にうつる聲』を介して、国境や言葉の壁を越えた瞬間でした。

中華大学の学生達もまた、大粒の涙を流してくれていました。その姿は、帰国した今も私達の胸に強く焼き付いています。

●4月30日、帰国。

公演翌日早朝。昨晩の余韻に浸る間もなく、私達は空港に向かいました。台湾に滞在した5日間は、本当にあっという間でした。しかし、たくさんの人と出会い、たくさんの想いに触れることができた、充実した5日間となりました。

誰もが最初は市民参加の舞台が、海を超えて台湾・新竹市の地で、しかも日本語で上演できるとは思っていなかったはずです。それは、今企画を考えて動き出したスタッフ達でさえ確信があったわけではなかったのです。

それでも、実際に公演が行えたのは、私達を信じて協力してくださった方々や支援してくださった企業に団体、そして応援してくれた人達がいたからです。この感謝をしてもしきれない程の多くの「ありがとう」を伝えるにはどうしたらいいのだろう、そして、この想いを継ぐには・・・岡山に帰ってからそう考えている私達がいます。

◆おわりに

平成26年4月29日の台湾新竹市での一夜は、私達やその空間を体験し、「共有」した人達にとって、本当に奇跡のような一日となりました。

そしてあの日、私達はこの一年間の企画にピリオドを打ちました。しかし、その途端にもう一度あの人達に会いに行きたいと思っている自分達がいるのです。

私達の「ありがとう」がちゃんと伝わったのかは分かりませんが、あの瞬間を「共有」した人達の中に何かを芽吹かせたことは確かです。

「台湾・新竹市、國際會議廳」で同じ時間を共有した全ての人の心の中に、この物語が深く刻まれている。そう信じてやみません。

そして、この色々な人の中に刻まれた物語は、いずれ蕾となって新たな行動を呼び起こすのです。

終わってはいません。これから始まるのです。多くの花を咲かせて岡山と台湾の花束を作るために・・・

岡山市・新竹市友好交流協定締結10周年記念「新竹市演劇公演」

事務局一同